

駒沢大学禅宗史研究会編著

『慧能研究』

鏡島元隆

六祖慧能は中国禅の大成者として、また日本禅の源流者として禅宗史上、達磨についてもっとも重要な祖師であることはいままでもないが、慧能研究が本格的になされるようになったのは、敦煌文献が紹介された近來のことであり、鈴木大拙氏・宇井伯寿氏等を先導として続統とその成果が発表されてきた。しかし、このような研究の盛行にもかかわらず、慧能その人の伝記および思想はかならずしも明らかでない。というよりもむしろ諸家によって見るところが異なり、いずれによるべきか学者をして適従に迷わしめるものがあるというのが実状であろう。従って、諸家の説を正しく受けとめ、慧能を真に究めるには、慧能その人の思想と行実を伝える根本資料の検討が先決でなければならぬが、これは言うに易く、行なうに難いことである。

しかるに、本学の田中良昭教授を首班に、禅宗史研究の中堅・新進学者九人の共同研究になる『慧能研究』は、この要請に応えたものであり、まさしく出るべくして出た書である。本書は、大別して研究篇と資料篇の二篇に分れるが、研究篇は慧能の正確な伝記の解明のための作業であり、資料篇は慧能の思想解明のための作業である。

本書の前篇、研究篇は、第一章『曹溪大師伝』の研究と、第二章慧能の伝記研究の二部に分れる。『曹溪大師伝』はわが国の伝教大師最澄によって将来された最澄自筆本（一説唐人書写本）と称される国宝の書が存することから早くから知られていたが、本書の『曹溪大師伝』の研究はこの叡山本を底本として、道忠本・興聖寺本・続蔵本の三本と厳密な対校をなし、訓読・補註等を加えたものである。

第二章慧能の伝記研究は、慧能の伝記の基礎資料一八種について、五三項目にわたって各資料間における変遷の経過を論述したものである。本書におけるこの試みは、関口真大氏の『達磨の研究』（昭和四二年、岩波書店）に範を求めたものである。関口氏の『達磨の研究』は、達磨伝の最古の資料である『洛陽伽藍記』（五四七）から、達磨伝の完成をみたとされる『伝法正宗記』（一〇六一）までのおよそ五〇〇年間に、いかに多くの変遷がなされたか、その変遷のあとを一七資料について、四三項目にわたり詳細に追求したものであるが、同じ問題意識をもって六祖慧能について、その記述内容が時代とともにいかに変化したか、慧能像の変遷のあとを追求し、解明したのが本書第二章の慧能の伝記研究である。すなわち、慧能についての最古の資料である『瘞髮塔記』（六七六）から、宗宝本『壇経』に付せられた『縁起外記』（一二九一）にいたるおよそ六百年間に、慧能像がどのように変遷したかを一八資料の五三項目にわたりいちいち検討したものである。これは、研究者を大いに資益するであろう。というのは、われわれが慧能に対して抱く祖師像が、実はある時代のある著述によって変化された

慧能像であって、かならずしも原初的な慧能像ではないことを知らしめられるからである。たとえば、慧能は一客の『金剛経』を誦するを聞いて発心し、黄梅山に上って修行したと伝えられるところから、慧能は『金剛経』に親しい人であるというイメージを抱き易いが、それは後の慧能伝によって変化された慧能像であって、慧能は元来は『涅槃経』に親しい人であったことが知らしめられるようなものである。

右はただ一例を挙げただけであって、慧能が元来『涅槃経』に親しい人であったことは、本書の創見ではなく、すでに柳田聖山氏によって指摘されていることであるが、『初期禅宗史書の研究』(二二四頁)、本書のように各資料間におけるその変遷過程が詳細に分析表示されると、その間の経緯が一目でわかる便益を得られるのである。

本書の統篇、資料篇は、第一章『六祖壇経』、第二章『金剛経解義』、第三章慧能関係資料集成より成る。『壇経』は、慧能の禅法・思想を解明する根本資料として、唐より今日にいたるまで各時代を通じて広く読まれた書であって、十種を超える異本を出し、それらは近時柳田氏によって、十一種の異本が集成刊

行されているが、『六祖壇経諸本集成』、昭和五一、中文出版社)、本書では敦煌本・大乘寺本・興聖寺本・徳異本・宗宝本の五種異本の全文が分類対照され、各本間の異同を一目瞭然たらしめている。

周知のように、『壇経』は各異本間の文章の異同が著しいため、従来このような試みがなされたことがなく、これを分類対照して示したのは、本書の苦心の存するところである。これがため、本書はかつて鈴木大拙氏が敦煌本を基準として分類した五七節を踏まえた上で、新たに詳細な検討を加え、『壇経』の全体を九二節に分類し、諸本において対応する文章が、それぞれ対照してみられるように組版されている。この原文対照によって、本書では同一節中の文章語句の増減・改変・移動等の様子が一目のもとに把握できるように工夫されている。

第五章は、慧能の著作として古い伝承をもつ『金剛経解義』の校註である。この書は、近年にいたるまで本格的な学問研究は等閑視されてきたが、そのことの誤まりを指摘し、本書の書誌と思想との両方面に関する研究の必要性を喚起したのは、関口真大氏である(『禅宗思想史』、昭和三十九年、山喜房仏書

林)。これに依えて、本書では、『金剛経解義』の基礎資料である底本を京大本に決定し、これに六地藏本・五家解本・川老本・内閣本・明暦本の六本を対校して示したのである。『金剛経解義』研究の必要性を力説した関口氏も、『統蔵経』本以外については触れていないのであるから、六本の異同校訂をなした本書は、今後の『金剛経解義』の研究に寄与するところ大きいであろう。

第三章慧能関係資料集成は、研究篇中に収載した一八種の伝記資料、および資料篇中に収載した『壇経』・『金剛経解義』を除いた他の諸資料を蒐集したものである。本書は、慧能に関して記述された古来よりの諸文献の中で、原則として中国元代以前のものに限って可能な限りこれを探索して摘出し、これを編集し、年代順に排列総集したものである。従って、ここには慧能についてのすべての資料が集められているから、研究者は多くの資料を渉猟する煩を省き、勞せずしてこれを手にすることができるのである。

以上のほか、本書には巻末付録として、詳細な慧能関係年表と、従来数多くなされた慧能研究文献目録が付せられており、さらに全資料の原文について、人名・地名・寺名・書

名の索引が付されているから、文字通り慧能全集であつて遺漏するものがない。なお、以上のそれぞれの文献資料には研究班諸氏の解説補注が付せられている。それぞれの文献・資料についての解説補注は、現段階における最新の学術的成果を踏まえたものであつて、研究者を資益するところ大きい。

以上紹介したように、本書は慧能に関する資料の蒐集および解説として完璧といふべきものであるが、ただ本書を研究篇、資料篇と分ける編成方式については問題がなくもなからう。本書の資料篇の序には、「右のような本篇の編成に対して、先の『研究篇』にも多くの原資料を含み、一方、『資料篇』中にも研究的な内容を付載するという矛盾に対する批判が存するかも知れない」と述べて、これに対し弁明を試みているが、慧能の伝記資料は研究篇に収め、思想文献は資料篇に収める、という分けかたはたしかにおかしい。もし本書が題するように、『慧能研究』であれば、資料は柳田氏の『初期禅宗史書の研究』(昭和四二年、法蔵館)のように終尾に一括して収載すべきであらうし、慧能に関する全資料の蒐集・解説であれば、本書は『慧能全集』または『慧能資料集成』という題名がふさわ

しいであらう。しかし、また本書がそのような不整合に気づきながら、敢て『慧能研究』と題したところに、現時点における仏教学界の研究趨勢が示されているとも言える。伝記についての研究は比較的容易であり、また進んでいるが、思想についての研究は容易ではなく、また一向進んでいないからである。その意味で、本書は『慧能研究』と題しても、思想面においては慧能に関する資料を研究者に公正に公開したものであつて、慧能の思想研究は研究者各人の今後にまかせたものと言

田島柏堂著

『瑩山』(日本の禅語録五)

書評という場合、多くは問題点なり欠点に対する批判或いは要望が伴うものである。勿論そのような配慮も必要であらうが、ここではそのようなことに触れることなく、専ら紹介のみを主としたい。

曹洞宗の両祖のうち、太祖は高祖に比してとりあげられ方が尠い。しかし尠いながらも

えよう。

しかし、これだけの立派な成果を生み出した研究班である。これでおしまいということではいかにも惜しい。さらに引き続いて研究を継続され、慧能の思想研究から進んで中国禅研究の上ですぐれた業績を挙げられることを願うものである。

(大修館書店、昭和五十三年三月、二五、〇〇円、B5版、図版十六頁、序・目次十二頁、本文六五七頁、索引、英文梗概二十四頁)

光地 英学

近年は比較的太祖関係の出版物が出るようになった。太祖降誕七百年(昭和四十二年)記念として、以前のものに新たに洞谷開山瑩山和尚之法語と教授戒文とを編入して大本山総持寺より「常済大師全集」が再刊され、同太祖六百五十回忌記念(昭和四十九年)として同本山より「伝光録白字弁」の再刊、「常済